広島・長崎被爆記録

虹の橋

林　波　満
野方六丁目

被　爆　地　広島市　翠町　約二・八キロメートル
被爆時年齢　満二二歳

被爆前後

私達親子三人（長男一郎、一歳）は中野区鷺宮（町名改革で現野方）に暮らしていた。一九四五（昭和二十）年四月、夫の二度目の応召により、疎開することになり、母が広島から手助けに上京した。五月の夜間空襲で近隣にも焼夷弾が落ち、危険を感じ、六月一日広島へやっと辿りついた。毎日のように警報が出て殺気立っていた東京にくらべ、あまりの平穏さに一郎と私は郊外の安村へ疎開の予定を一日延ばしにして二か月が過ぎた。

八月六日朝、母は家屋疎開の奉仕に私に代って雑魚場（爆心地より一・三キロメートル）へ向う。私と一郎は電車通りまで見送り、近くの公園を巡って家に戻った。一郎の手足を洗い、二面硝子戸を開け放っている化粧部屋へ入る。「はま子、あれはなんじゃろか」台所に居た祖母の叫び、と同時に閃光。壁が崩れる。とっさに一郎を抱き抱え、倒れた家具やガラスの破片の中を突き貫け裏通りへ出る。壁土や土埃が疾風のように吹きぬけ、夕暮のように暗い。家の床は落ち、廊下は凸凹、天井は吹き飛ばされ青空が覗いている。

私は家の前の旧制広島高等学校のグランドに爆弾が落ちたかと思い、母が心配してとんで帰って来てくれるかと心待ちしていた。校舎の裏手、北方に白い煙があがって来た。

どれほどたったか、「お母さんが帰って来ちゃったよー（来られた）。たまげなさんな」近所の人の声。母は、一見誰かみさかいもつかぬ。真黒に煤けて腫れあがった顔、ぢりぢりに焦げた髪、両腕の火傷、白いブラウスはめろめろ。「坊は」一郎の無事を聞いてその場に崩折れた。

「はま子でなくてよかった」。戸板にねかせ木陰に運ぶ。一郎をおぶって付添うが、手のほどこしようもない。焔の勢いはいよいよ強くなり、渦をまいて夏空に噴きあげている。音にもならぬ無気味な音が伝わってくる。床の落ちなかった一室を片付

け、夕方漸く家の中に落ち着く。母の火傷はだんだん火ぶくれに広がり、水が滲み色が変わってゆく。朝被って行った麦わら帽の焦げ端が髪にからまっている。電燈の無い蚊帳の中で、火の手の明かるみと懐中電燈を頼りに、布を湿しては痛む傷を冷す。「一郎をおろしては」と母。気付くと一日おぶっていたのだった。食事などどうしたのか覚えていない。嘔吐の母に水をふくませる。「少し腫れがひいたようよ」と自分への気休めを洩らしながらも不安がつのる。やりきれない。

夜の白むころ、母はぽつりと「いま何時ごろかの……」、庭づたいに夜通し聞えていた隣家のうめき声もぷっつりと途絶え、時刻が止まったようだ。水を汲みに庭に出ると蚊の翅音が耳を掠める。

救護所へ

翌七日昼近く、母を大八車で旧女専の救護所へ運ぶ。教室の中は異様なざわめきと沈黙。力なく横たわっている少年のわきで、「この子は目をやられたんです。横川で。」虚ろな眼差しで母親は座りこんでいる。火傷や怪我でうごめいている人の間をたまに兵隊が抜足で通りぬけてゆく。

母の呼吸が荒くなってきた。助からないのかも……弟（旧旅順工大在学中）に何か言伝は」と、何度も逡巡しながらとうとう言い出せなかった。午後二時ふっと眠ったように静かになる。楽になれてよかったと、はかない望みを託し、昨日からの緊張がほぐれほっとする。が、そのまま十五分、息をひきとる。享年四五歳。

訣れ

八日、市の外れ宇品線の向こうにある大河の陸軍部隊へ、母の亡骸を運ぶ。途中青く展がる蓮田は点々と焦げていた。入江に沿った山陰の部隊はひっそりと別世界だった。荼毘に付す間、掘っ立て小屋で待つ。兵士の手で懇に運ばれて来た母のお骨を、祖母と一郎と三人で淡々と拾う。

人間としての感情も感動も干上がってしまっていた。湘南（神奈川県）の部隊にいた主人は許可がおり、二日がかりで九日の夜広島に着いた。途中「広島は生きている人はいないよ」と言われながら。門をくぐって懐中電燈の明かりに、足元の箒目の跡を見つけ「生きてるな」と。

祖母

あの朝、台所の窓から『くす玉のような』（祖母の表現）浮遊物を見た祖母は、その後もリュックを背負っては買い出しに行くほど元気だった。九月末頃から「体がだるい。お布団のあげおろしがつらい」とこぼし始め、痩せ細って、髪が束のように抜け下痢症状も加わった。

「ピカのせいかの」当時は一般の医師に原爆症など判らなかった。昭和二一年五月、満六四歳で亡くなった。尚私と一郎が疎開させて頂く予定だった、安佐郡安村の母の従妹も、当日家

屋疎開奉仕に動員され、県庁の塀の下敷きになって死亡した。

後遺症

被爆の秋に入って私は足に腫物が出来、倒壊をまぬがれたものの、ガラスは壊れ、がらんどうの日赤病院へ長く通った。患者が多く玄関前で治療をうけたりした。歯ぐきの腫、出血、痛みは後年まで続き、ペニシリンを打っても治らず、抜歯した。めまい、高熱と断続的に襲われ、その度に被爆との関連を恐れ、焦り、懐疑の日々を過ごし放射能の影を引きずりながら、自らを奮い立たせて来た。

一郎

被爆時年齢　満一歳十一ヶ月
死没年月日　昭和二四年十一月二六日
死没時年齢　満六歳二ヶ月
死没の原因　急性骨髄性白血病

被爆の翌年二月、一郎はひどい下痢と高熱（水銀柱が頂点に達するまでの）に襲われ、三日間続いた。二一年五月東京に戻った。一郎は戦後の食糧不足の中で健やかに明るく育っていた。昭和二四年九月、六歳の誕生日の前後より、発熱、下痢、尻の痛みを訴え始めた。外科医のP先生の診察を受ける。「単純な肛門周囲炎です。生命には別条ありません」。しかし腫物は二つ三つと増え、熱は三九度を上下。ホームドクターの内科医は顔色の冴えないのは蛔虫のせいと、検便をした。

十月に入って枕のカバーに抜毛が目立ちはじめた。切開手術―あばれる子の手足を押さえているのはつらい―ペニシリン注射。何の効果も無い。血の気のない顔色、灰色の爪、先に原爆症で逝った祖母の容体に似てくる。おそるおそる、反面否定されることを期待しながら医師に尋ねる。「四年も経っていまごろ」と一笑に付される。何ものにも訴えようのないもどかしさ。半信半疑の焦り。代わってやれるものならと手当をしながら、朝な夕な心が痛んだ。歯ぐきからの出血も、熱で乾いた唇の合わせ目に黒々と固まっている。枕元には、唇や眼瞼の裏の血色を気にして、小さい手鏡が本などと一緒に置かれている。激痛と高熱の頻度を増して来る中で紙芝居の拍子木が鳴り始めると、ふっと眼に生気が出て、起きて行きたがった。

十一月、体温計は四十度の目盛りを越すことも。発汗、胸の痛み、頭痛、吐気、ふんふんと息をはく。P医師からそれとなく、この患者から敬遠したいことを洩らされる。

「神様どうぞぼくの病気を治して下さい。治れば皆が喜んでくれます。そしてぼくのように寝ている人もみな治して下さい。」

お隣のおばさんから頂いたお地蔵のお札を握って、夜半の床の中で一心に祈っている。十一月十四日、N病院へ入院。小康を保つ。スケッチ帳を胸にのせ、三日月の口から沢山の星がはき出されている絵。二階の建物はここの病院、一番端っこの入口に電燈がついている。

十七日「ぼくの貯金を全部お父さんに渡して」、紙芝居に行かれなくなって貯めたものだった。その晩遅くI院長に主人が呼ばれ、「……白血球の幼若性…赤血球も半分以下…白血病と…」一郎の病状の憂慮すべき状態であることを告げられる。二四日の夕刻、一郎はみかんを自分で食べたいと言う。皮を剝いて持たせると、ふるえる手で、一房、一房筋をとりながら口へふくんだ。そしてさも満足そうに仰向きになった。

そのあと容体は急変。「脈がとても悪い。こんなに早く来るとは思わなかった」とI院長。その夜九時近くK病院の放射線科科長のY博士が診察のため病室にいらしてくださった。午前一時、院長より、病状は白血病に疑いのないこと、K病院へ転院治療するようにとの見解を告げられる。一郎の衰弱は極度に達し、これ以上幼い心に恐怖と動揺を与えるにしのびず、遅すぎたと、悔恨と無念に嘖まれながら、主人と私は一郎の転院を断念した。

午前二時ごろから、一郎の意識は断続的に混沌とし、「あ、あ、ローソクが…消える」「おま…い…り」「…さん…びか」私は涙で咽びつ、歌ってやる。「うるわしきあさも……」色褪せた唇から幽かに声が洩れる。二五日、意識は肉体を離れ天を駆け廻っていた。

夜中黄色く透きとった両腕を垂直に伸ばし、夫の伸びた髭の顔、眼鏡とまさぐる。微かに「お・と・う」午前一時I院長の指示でリンゲルを打たれる。胸のぐるぐるも消え、哀しみの面が端麗に、穏やかな笑みも浮かぶ。感受性は強いが、いたずらっ子だった一郎は、幼稚園で覚えた賛美歌に安らぎを求め、お守札を最後まで握りしめ、せい一杯抗らった。

国の犯した大きな悪である戦争の責苦を負わされ、それを恨むことも知らず、三か月の不憫極まる闘病に力尽き、初冬の暁闇に小さなむくろとなった。

一郎の病理解剖の申し出を承諾し、夫は前後四時間に亘る解剖に立合った。（以上　亡夫　林　芳郎著「一郎」を参照にして記述。）

一郎の日記より＝幼い芽＝

昭和二四年三月二五日、なつになったらせみのかゴをかってもらいます。三月二七日、きょうわはなをうえます。四月四日、りょう（弟）わかぜをひきましたから　しずかにしてください　四月二五日、あしのこでよつとおみました。四月二八日、ゆうゴはんをたべ［じ］よーろとたねをかつてきました。七月二四日、むさしせきこうゑんにいきまました。プールにとびこみました。七月二八日にじのはしおみました。七月三〇日かえるがきんぎょのかめにおちていましたから　しゃくでだしてあげました。　月　日（病臥してから＝母＝筆者＝）ようちえんおやすんでる。